複合文化施設の可能性

― 東日本大震災以降のアーカイブ、市民協働、ミュージアムネットワークのプラットフォームとして

Possibilities for a Cultural-arts Complex

The Platform of the Archives and Civic activities, Museum network After 3.11

清水 有 | Tamotsu SHIMIZU

This paper represents continued work at Sendai mediatheque (SMT) and its changing role as cultural institution. This topic paper will present theories related to museology in the context of challenges and developments emerging at this 21st century media center. SMT supports civic intellectual activities using various media. It hosts a wide range of activities such as exhibitions, screenings and workshops organized by and for diverse grass-rooted groups. The Great East Japan Earthquake, which occurred on March 11th, 2011, was an event that drastically altered the mission and direction of SMT.

It is of high significance to investigate the role of a Cultural-arts complex represented by SMT in the face of a large-scale disaster, in terms of exploring the value and mission of this museum. In particular, the role of smt as platform presents a new perspective towards describing a theory for a Cultural-arts complex.

Keywords:
Sendai mediatheque, 3.11, platform, museology, media studies

0. 序論

2011年3月11日14時46分に発生した東日本大震災は、日本社会にパラダイム・シフトをもたらす出来事でもあったと同時にその後の復興の過程においても多大なる変化をもたらした事件であった。この分岐点は、やや視野を狭めて観察をしてみると、文化、芸術施設の変化もまたしかりである。それは単に、施設設備や収蔵品への被害だけでなく、その場で働く、管理職や現場のスタッフ、警備や清掃といった委託業者までもが感じた、自らの居場所に対しての危機であり、「精神の危機」とでもいう「揺らぎ」についてでもあった。

本論は、国際的に知られる建築である「せんだいメディアテーク(以下smt)」の運営に、1999年の開館準備室から携わってきた筆者(現在学芸員兼企画事業係長)が、様々な事業の運営体験を通しての複合文化施設の変遷を辿り、今後の複合施設の方向性を考察した試論である。

特に2011年の東日本大震災を挟み、復興と平行して考察してきた2014年5月3日のICOM(世界博物館大会)での発表の論題 'The Platform of the City—The Role of sendai mediatheque After 3.11— に拠るところが大きい。この発表の論点は、震災以降の新しい状況に直面し運営に携わった経験から、smtが都市の中において様々なプラットフォームとなる可能性についてである。特に仙台市におけるsmtのユニークな建築としての立場や、復興の過程から発展した3つのプラットフォームという概念から、smtという複合施設の存り方を考察したが、震災から4年が経ち、復興期の完了とともに、通常期に収束していく時期のケーススタディ(事例研究)をもとにまとめこれから始まるsmtの新しい働きについて考察していきたい。

よって本論の構成は「せんだいメディアテーク」という複合施設についての特殊性を理解する為に「smtの建築的特徴」を詳解しsmt事業の根幹の支える「smt三憲法」や「アンダーコンストラクション」の概念にも触れ、開館10周年記念事業、並びに東日本大震災以降の事業の展開や変遷を確認したい。

筆者のポジションはユニークな立場であるが、同時に、この立場からの発言にはある種の偏愛によって誤解をあたえてしまう恐れも十分考慮したが、今この状況の視点でしか報告できない好機ととらえ、出来る限り中立かつ公正な観点で現在までの情報と状況を提供したいと思う。これはある種のエセーという側面があり、また、さまざまな写真やデータを端的にまとめた簡易なデータ集であり、タイムラインである。またはメディアテークに一番長く携わったスタッフによる16年目の報告でもある。

[写真1] せんだいメディアテーク南東よりの外観
(撮影2014.0620)

[写真2] 7階、5番チューブより天井を見上げる
©Izuru ECHIGOYA

1. せんだいメディアテークという複合文化施設

1-1　メディアの入れ物、棚

せんだいメディアテーク(以下smt)は2001年1月26日に仙台市にオープンした仙台市の市民利用施設である。元来その「メディアテーク」という単語は造語で、フランス語にある「棚」や「入れもの」などを意味するテーク(theque)とメディア(media)の合成語である。その建物は地上7階、地下2階、総面積は約2万1千㎡。市の中央図書館的機能を持つライブラリーをはじめ、作品を収集しないクンストハレ型(Kunsthalle 芸術ホールの意:ドイツ語)のギャラリー、16リから35ミリ、ビデオやDVDと多彩な上映機能を持つスタジオシアター、屋内型公開空地の機能を持つ1階のオープンスクエア等を有し、各種展覧会、上映会、ワークショップなどの開催ができる設計である[写真1]。

この建築を一躍世界的な建築とさせた理由[1]は、建物全体に通常の建築物には必ずある柱や梁といったものはなく、13本のチューブとプレートによって形成された建築だったからである。床はハニカム構造(蜂の巣)という2枚の鉄板を溶接で挟んだプレートで中には空調の空気の配管や電気配線、情報回線などが入り、これが全館に敷設されている。また外壁もほとんどの階がガラス面で覆われている。特に南面はダブルスキン(2枚のガラス層)といってこの間にできる空気の層で夏と冬の寒暖差を緩和し館内を快適な環境にしている。smtの建築的特徴を決定づける3つの要素に注目してその詳解をしたい。[2]

1-2　チューブ(Tube)

smtには、13本のチューブ(tube)があり、チューブは床(plates)を支えるという構造的に重要な役割がある。垂直方向に建物全体の重力に対して13本のチューブ全体で支えている[写真2]。13本のチューブには様々な特徴があり、それぞれ、空気、水、光、人、そして情報がこのチューブを階の上下に行き交う。

1-3　プレート(Plates)

Smtの地上階(2F-7F 屋上)までの床をPlatesと呼ぶ。厚さ6.25mmの二枚の鉄板に挟まれて出来ている。プレートの厚みは400mmで、この上に70mmから100mmのコンクリートをうち、合成の床板でつくられている[写真3]。13本のチューブが直接このプレートをささえるという構造は船

の構造に似ている。鉄板の接続部分は全て溶接で接合しており、接合によってできる箱上の構造はハニカム構造と言われる。

1−4　ダブルスキン(Dobleskin)

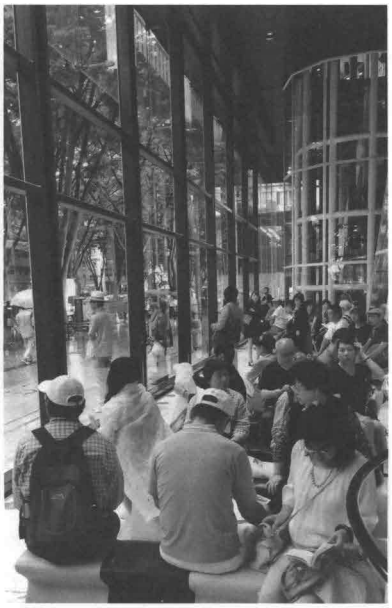
smtの南側の定禅寺通りに面している幅52m、27.7mの二重のガラス[写真4]。ガラスの間隔は約1mでその間隔にある機構の最上部には換気用のガラスの窓があり、開閉する装置となっている。この換気の窓を夏期は開放し、温度差から生じる上昇気流を発生させて暖気を外へ逃がし、冬期は換気窓を閉じ、日光によって暖められたダブルスキン内の空気を暖めて空調の暖房コストを軽減させる。また外面のまるで鏡の様な表面は四季折々のケヤキ通りの美しさを映し出し、通りを演出する効果を持つ。

1−5　smt各階の特徴

「チューブ、プレート、ダブルスキン」が建築的特徴の三要素であることは間違いないが、その他のユニークなインテリアデザインについても記しておく。一階のガラス扉から入館する際に必ず目につくのがオープンスクエアである。そこに広がる20メートル四方の平戸間と天井高6.9mの広々とした空間、そしてその中央にあたかも海藻のように立ち上がっている巨大な3本のチューブ(柱)が、印象的である[写真5]。また大型開口扉をあけると公開空地でもあるオープンスクエアは、定禅寺通りと一体化して屋内公共広場として機能するようになる。

[写真3] 5番チューブ内の床と天井部分のプレート
©Izuru ECHIGOYA

[写真4] 7階の南面ダブルスキン構造の窓面



[写真5] 定禅寺通りに面した大型部分
館内より撮影　閉時

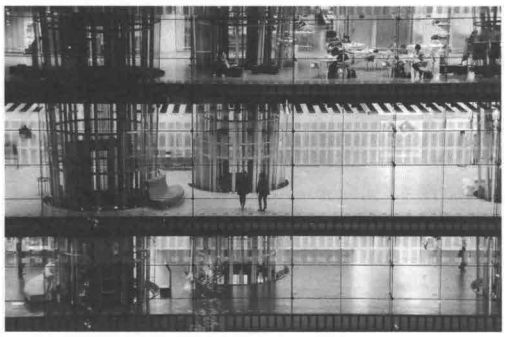
2階はメディアの最新情報(例えば300タイトルを越える世界の雑誌や新聞などやバリアフリー情報)を提供するフロアで、smt全体のインフォメーションでもある。このほか児童書コーナーには3万冊の子どもたちの本が用意されている。この階の家具デザインは建築家、妹島和世[3]による。

3階4階は一般書開架12万冊の図書館で、4階は郷土資料などを含めた専門書が中心の図書館である。斬新な赤いベンチなど、この階の家具デザインは手塚好明と小池ひろのによるものである。

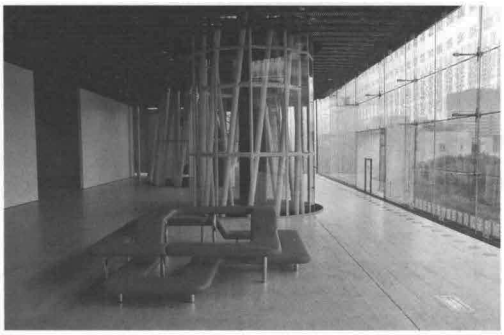
5階と6階のソファなどのデザインはエジプト出身のデザイナー、カリム・ラシッドによるものである。ビビットなカラー配置で各階の特徴を印象づける[写真7]。

5階と6階は天井高の異なったギャラリーである[写真6]。総面積は約2500㎡という全国でも有数の展示面積を持ち、あらゆるタイプ(特にメディアアートなどの展示に関しては不可欠な床下を走る種々のケーブルやネットワークがその力を発揮)の展覧会場に利用できる。

最後に7階は開館以来スタジオという名で運営され、映像関連のメディアセンターのフロアとして活用されてきた。



［写真6］ 道路を挟んで反対側の建物よりsmtの5階と6階を臨む。



［写真7］ カリムラシッドデザインのソファ 通称メビウスチェア

［写真8］ 7階南面 震災後の変更で打合せ場所として活用（2014.10.18撮影）

例えば本格的な映像シアターのほか、2007年度までは映像音響資料の貸出閲覧は7階にあった（現在は2階へ移動）。また同じくスタジオでは各種の映像メディア機器を活用した活動やワークショップが展開され地域における市民の為の出版局、放送局として活かされてきたが、震災以降は整理され、考えるテーブルを中心とした場の働きとして協働事業の開催が主流であり、まさに開館以来、永遠の「アンダーコンストラクション」[4]となる試みが続いているといえる［写真8］。

2. 三憲法とアンダーコンストラクション

2−1　メディアテークとは何か

メディアテークの先行事例としてはフランスのポンピドゥーセンター（1977年完成）や、これに端を発してヨーロッパ各地に広がった施設があげられる。[5]

元々のメディアテーク建設の発端は、平成元年の美術館および大型ギャラリー建設の陳情にさかのぼる。その後、さまざまな紆余曲折を経て、仙台市は定禅寺通りの市バスの操車場跡地（バスターミナル）を核に近隣の店舗を買収し、そこにギャラリー、図書館、映像文化ライブラリー、目や耳の不自由な方のための情報提供事業の4つの機能をもつ大型複合文化施設を建設することを決定した。当時は様々な意見を集約し、言わば足し算をしただけのハコモノとして立ち上がった話であるといえる。

2−2　設計競技による選定

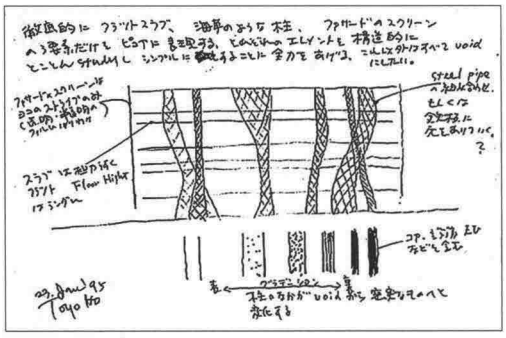
当初からsmtの建設は仙台市のシンボルロードである定禅寺通りに面する一等地への大型施設の建設であり、当初から施設の基本機能に加えて、周辺街区のさらなる活性化に向けた起爆剤となることが期待された。平成6年に実施した設計競技は、磯崎新審査委員長の発意により、単なる複合施設を超えて、メディアをキーワードにした新しい時代の公共施設の概念を問いかけるもので、その内容や公開性の高さも相まって大きな関心を集めた。そこで最優秀となったのが建築家伊東豊雄の案である［図1］。前述した3つの要素である「スキン」、「チューブ」、「プレート」からなるシンプルで美しいな構造は、世界中に賞賛と期待を呼び起こしたが、公共施設の空間としては施設運営面からみても画期的なものだといえるだろう。空間としてのバリアを極限までなくすことで、この場所では、運営者と利用者、提供者と享受者、障害者と健常者など、従来固定的にしかとらえられてこなかった関係が楽しげに透過しはじめ、メディアの新時代にふさわしい「なにか」を予感させていたからである。特にsmtの施主が一地方都市の行政組織であった事も斬新なことであった。当時一般的に言って行政の準備する複合文化施設には、商業施設に多くあった、美しさや華やかさとは対照的な耐久性や質素さが求められていたが、smtは、これらの建築とは一線を画するものであった。これもさまざまな建築家に平等に開かれた設計競技による選出であった事が大きく関係しているといえるだろう。

2-3　三憲法

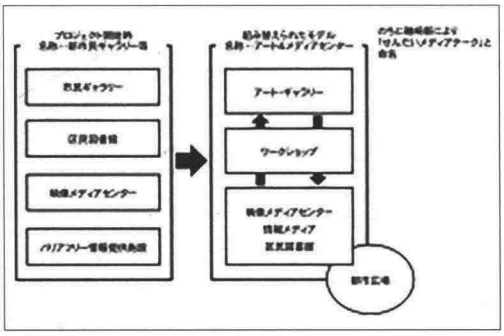
さて設計着手後、与えられた施設機能を着実に実現するために仙台市は、建築家やメディア関係の専門家、市民ボランティアなどで組織するせんだいメディアテーク・プロジェクトチームを発足させた。電子メイルなどを活用し、意見交換しながら、激変していく社会に即した運営、サービスを具体的に議論していくことになった。そうした議論の積み重ねの末に、メディアテークの運営理念として次の3項目を掲げることがチームの桂英史氏から提案された。①最新の精神を提供する、②ターミナルではなくノードへ、③あらゆるバリアからの自由である。後に「smt三憲法」もしくは発案者の桂英史氏の名を頂き、「桂三憲法」と通称で呼ばれている。「開かれた運営」ということがともすればお題目でしかなかった当時の全国の公共施設の状況にとって、この3つの理念は、回路を開くための鍵として、また、それは永遠のアンダーコンストラクションという、領域やメディアなど限定しない常に変わり続ける「場」として、引き継がれていった。

2-4　建築から導かれる「振る舞い」

特に、3番目の「あらゆるバリアからの自由」という項目は、



[図1] 伊東豊雄氏の初期スケッチ
『せんだいメディアテークコンセプトブック』より採録



[図2] せんだいメディアテークの初期モデル
『せんだいメディアテークコンセプトブック』より採録

前述の「アンダーコンストラクション」の概念に続き、この建築内での振る舞いにおいて大変重要なコンセプトと言えるだろう。例えば、オープンスクエアは外界との境界がなく、日本の建築にそれまでは多く見られた、段差は皆無であり、また視覚的に遮る壁もない。オープンスクエアでは、実に様々なイベント（企業のショールーム、サイエンスカフェ、種々の音楽祭、巨大画の展覧会、ファッションショー等）がほぼ毎日のように行われており、また当日不意に来たお客も飛び込みでイベントに参加できるというセレンディピティ[6]効果が期待される。文字通り様々なバリアからの自由というコンセプトが付与されている施設と言えるだろう。

smtの各階は天井の高さ、床、照明、家具またはすぐ外に広がる四季のケヤキ並木との関係などが微妙に変化して、均質ながらも表情の異なった空間において利用者は自由を享受できる。このように様々なバリアが取り払われ、光と風が通りぬけるsmtの快適な空間では、あたかも水族館の中を周遊する魚のように、利用者は各階層へ自分の関心の赴くままに浮遊していくことができるのである。従来の美術館や図書館といっただけの専門的な公共施設に比較すれば伝統的な「公的規制」は少なく、利用者の振る舞いについての許容度が非常に高い空間と言えるだろう。代わりに建物は常に利用者や管理者を挑発し続け、生き生きとした個人の感受性を表現できるような「アイデア」や「振る舞い」を求めている。

2-5　名付けられたメディアテーク

さて、これは、『せんだいメディアテークコンセプトブック』の（p026）に示されたモデル図である［図2］。

設計競技までに出てきた4つの案件を整理し、建築家、磯崎新の自身の解説によりメディアテークと名付けられる。つまり、感性メディアとしてのアートと、知性メディアとしての図書や各種の情報、そしてその両方が融合する新しいメディアとしての映像の集積提供を行うとともに、市民一人一人が創造し発信者となることを支援する、そんな新しい時代の都市機能空間をイメージするものと定義された。ヨーロッパではZKM[7]に代表されるアートとデジタルテクノロジーの融合や研究やメディアアーティストの養成に力を入れるドイツの様な型と、フランスの施設の様なビブリオテークを中心におき、アートと情報の融合をはかる型にわかれるが、仙台はこのどちらも融合した形で（当初はフランス型に近い）が、このコンセプトがあることで、従来型の美術館ともコミュ

ニティセンターとも、そのどちらともいえない、まさしくメディアテークとでもいうべき新施設の誕生に繋がるのである。

3. 開館10周年記念事業「いま、バリアとは何か」

3-1　10年目のsmtを臨検する試み

開館から10年目にあたる2010年度は、「いま、バリアとは何か」という年度を通しての事業を開催することになった。10周年を迎えるせんだいメディアテークでは、情報化とグローバル化の中におけるさまざまなバリア（身体、言語、性差、民族、空間など）をめぐるリアリティを、次世代を切り開くためのアートの展示を開催［写真9、10］したのである。

アーティストとして、北川貴好、小山田徹、フォルマント兄弟、藤井光、光島貴之、港千尋等のメンバーが参加し、市民や多くのインターンシップの学生と協働しながら年間を通しての事業展開をはかった。特にそのカタログの中で佐藤泰副館長（当時）は、「メディアテークとは何か」という論考を書いており、その中でも「問いとともに回答のないまま温存させることに繋がった」と記している。せんだいメディアテークは実際、石井威望名誉館長の論考にあるように「オン・プロセス（動きながら考える）」をモットーとし、開放的で予測不可能なパラダイム・シフトを様々な形で先取りしシンボル化するという役割を担うはずである[8]と考察されていたが、この時点ではまだ「メディアテークとは何なのか」というクエスチョンの答えは出せないままであったのである。

［写真9］Dobles kin landscape Project 北川貴好 ©Izuru ECHIGOYA

［写真10］栞プロジェクト　港千尋©Izuru ECHIGOYA

3-2　メディアテークから、未来を語る

様々なイベントが開催される中で、その回答を探すイベントともいえるシンポジウムが企画されていた。2011年の3月12日に「メディアテークから、未来を語る。」と題するもので、特にこのシンポジウムでは2001－2011年までの10年の間の変化を敏感に正面から捉え、変化に沿ってしなやかに運営していく事が自分たちには出来ているのかを見つめ直す機会としていたのだ。10周年事業時には大掛かりなアンケートも行い、またそのアンケート自体も7階に公開展示していく事で、ひとつのコンテンツとした事もsmtらしい取り組みだったと言えるだろう。興味深いのはその「smtの好きなところ、嫌いなところ」というアンケートの問いかけに、「現代美術にきどらずに接する事が出来る機会がある」との回答に対して、「自主事業で扱う作品が難しすぎる」と、相反した内容の回答があったのは大変興味深い。今となっては様々な話題については予測することしかできないが、例えば、この時のシンポジウムが実現していたとしたら、下記の事象に言及していたのではなかったか。それは、1.ローカルにある公共施設と市民との協働（市民力の実践の場として）、2.メディアの今後の進展とアートや図書館の融合の可能性、3.バリアフリーデザインの恒常的事業の実現、そして、4.smtの自律的な事業運営ならびに事業構想ということであったのではないか。しかし、その23時間前に震災が発生したのだ。

4. 東日本大震災の発生とsmt復興の過程

4-1　2011年3月11日14時46分

「メディアテークから、未来を語る」では、次の10年を見すえた議論が予定されていた。例えば、「smtを巡る様々なプ

ラットフォーム」。これはユーザーとスタッフが入れ替わりながらサービスを提供していくというsmtが常に目指してきたプログラムのあり方だったが、それを突き詰め、次の10年のプログラムを模索していくことであったと思う。

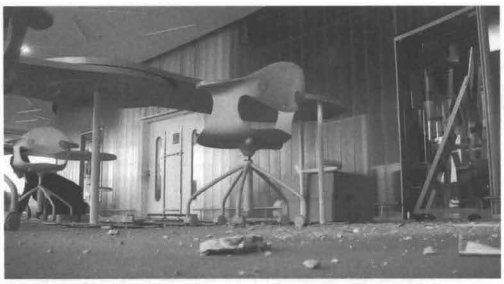
しかし3月11日の東日本大震災の発生により、smtは7階の天井部分の崩落、3階の南面ガラスの破損、1階南側ガラス大扉の損傷など、大小120ヶ所のダメージを受け、当然シンポジウムも中止となったのである[写真11、12]。

館にいた約150名の利用者やスタッフは全員退避し、怪我人は一人もいなかった。余震がおさまらぬ中で、特殊な構造を持つsmtは、遠方から建築構造の専門家に来てもらいチェックするには時間がかかったが、それでも津波や原発の問題が遭ったエリアとは異なり、仙台市はすぐに復旧にかかれる場所であり、またsmtもすぐに、復興の拠点とすべく仙台市からの指示が出された。

4-2　復旧の過程

職員は壊れたガラスや崩落した天井をよけ、暫定の開館の準備をはじめていった。実際に自分の手を動かし、事態を記録し、人と対話して答えをみつける。この時の「動き方のスタイル」はまさしく、前述の石井威望名誉館長の論考にあるようにオン・プロセス(動きながら考える)をモットーとし、開放的で予測不可能なパラダイム・シフトを様々な形で先取りしシンボル化を担うはずという予言めいた論述に立ち返らずにはいられないし、現在の我々の「振る舞い」や思考にも様々な影響を与えているのかもしれない。また、新幹線や道路網も完全に遮断されている中で伊東豊雄氏からの仙台市長やせんだいメディアテークスタッフへあてられたメイルが送られてきた。震災直後の出来事をまとめられた著作[9]にも記載されているが、様々な状況が阪神淡路大震災のときとは異なっていたことは特筆すべきであろう。

[写真11] 震災発生直後のせんだいメディアテーク7階
©Izuru ECHIGOYA



[写真12] Youtubeのキャプチャー映像の写真
©Izuru ECHIGOYA

4-3　再開事業　-あるきだすために-

震災後約2ヶ月が経過した2011年5月3日。応急の修復処置が終わった1階から4階までを部分再開し、1階では「あるきだすために」という再開記念イベントを開催した。それは、1階のオープンスクエアにおいて、市民一人一人が自分の気持ちと向き合い、再活動に向けたきっかけをつかむ一助となるような「ひろば」を設置し、語り、語られたことを聞く場として、大人向けの講演やトーク、子供向けの読み聞かせを行うとともに、震災関連資料等の展示や各種情報の提供をしたものである。なお当時、大阪大学総長で哲学者の鷲田清一氏(後のsmt館長 2013年～現在まで)が、震災を体験し傷ついた心を癒す為に阪神淡路大震災の経験もふまえ東北の被災地の人々に優しく語りかけられた。特にその中で鷲田氏の一貫した思想である「フォロワーシップ」の実践は長らくsmtの運営に携わってきた多くの専門職のスタッフへ大きな影響を与える事になった。

4-4　震災後の3つのプラットフォーム

そして10周年記念事業の時から思索されてきたsmtの3つのプラットフォーム(機能)もこの時期に形成され、形になり運営されてきたと思われる。

この3つのプラットフォーム(機能)は、現在も含めたこの次の10年を見すえる上でも重要なアイデアだといえる。一つ目は「アーカイブ」ある。「3がつ11にちをわすれないためにセンター 略称:recorder 311(以下:わすれン!)」という震災復興アーカイブがこれにあたる[図3]。わすれン!は仙台市の政策[10]に見合うことを確認した上で震災の直後から立ち上げられた。日々配信しながら、多くの映像や画像を二次利用可能なものとしてアーカイブしていく仕掛けを作ってきた。

4-5　考えるテーブル

二つ目は「市民協働」である。特に「考えるテーブル」が中心的な役割を担っている[写真13、14、15]。「考えるテーブル」とは、さまざまな人々が集い、震災復興や地域社会、表現活動について話し合い、その姿、状況をも作品化した家具のある場(全面が黒板になっている家具であるとともに、そこでの活動を指す)を作ることである。立場の違いを乗り越えながら、対話する事を中心に震災後の生活について考える「場」をsmtは提供しており、例えば、「てつがくカフェ」や「アーティストによるトーク」、また被災した史跡にまつわる自由参加の公開会議などいろいろなものがある。集った参加者も実に様々な人々であった。

4-6　SMMA(仙台・宮城ミュージアムアライアンス)

そして最後は、地域における「ミュージアムのあり方」におけるプラットフォームである。SMMAは仙台宮城の12館から構成された地域のミュージアムの協働事業体であるが、館園がばらばらに行ってきた活動を束ね、単館では不可能だった地域のさまざまな課題やニーズにも対応した大小様々な事業を行ってきた。震災後はますます予算の縮小化や被災地への働きかけも多くなり、この活動は大きな存在感を持ち始めてきている。

具体的な活動は実に多彩で、独自のwebサイトや「旬の見験楽学便」という広報誌、「せんだいノート」の出版や、クロストークやクロス展示、バスツアーやスタンプピクニックの開催等々、様々な人的交流により相互の理解が深まってきている時期だといえるだろう[図4、5]。またミュージアム被災地調査などの活動も行われてきた。

5. 結論

5-1　偶然から見えてくるもの

前述(2-4)で述べたように、仙台市の新美術ギャラリー建設構想が、様々な機能をもつ複合施設の構想へと変わり、磯崎新氏によって「メディアテーク」と名付けられた時から、3つのプラットフォームの可能性は、アートセンター、メディアセンター、コミュニティセンターという方向性は定まっていた。ただし、平時は実に様々な運営上のタスクがあり、オン・

[図3] わすれン!のロゴマーク

[写真13] 考えるテーブルのプログラム
「宮城民話の会」の様子

[写真14] 考えるテーブルのプログラム
「志賀理江子氏のアーティスト・トーク」

[写真15] 考えるテーブルのプログラム
「てつがくカフェ」の様子

プロセスの働き方ではその場その場の状況に従って、当意即妙な方法で進めてきた10年であった。しかし、それはともすれば、その場しのぎのちぐはぐな行動に堕してしまうおそれがあったといえる。しかし震災後の社会への向き合い方を真摯に思考した結果、現在は「3つのプラットフォーム」として収斂されて、相互に関連をもちながら発信力を高めていっているといえるだろう。さらに翻って、近世の歴史を振り返れば「リスボン大地震(1755年)」がやがてフランス革命(1789年)を引き起こす要因[11]となったように、偶然の災害は、いつも閉じられた社会のあり方に問いを投げかける。地域社会の複合文化施設は様々な知恵と解決法を持って常に何らかの回答をすべき存在であるべきであろう。その館自体は社会からの問いへこたえ続ける為に、常に先端を走り変化し続ける存在であるべきなのかもしれない。

5-2　10年後のsmt像

しかし、2011-2015年までの復興の期間においては、この3つのプラットフォームという外郭をフルに活用したことで、逆にsmtという本体装置をかろうじて動かしてきたのではないだろうか。震災後の数年間はこの3つのプラットフォームの視点で見えてくることだけを中心に語ってきたことも事実であろう。

[図4] SMMA(仙台・宮城ミュージアムアライアンス)のwebsite

[図5] ミューパス(SMMA ミュージアムパスポート)

「美術館は歴史の一器官ではなく、文化の一器官である。ということは、美術館にとっては、恒常的に変化しない事が極めて重要であることを意味している。注意してみれば、変化は改善の逆である。果実を揺らす事は果実の生育には何の役にも立たないのである」と、『プラド美術館の三時間』の中でエウヘーニオ・ドールスは変化のない美術館について語っている。また、

「シンボルとイコンの館である美術館を時代に開き、柔軟に適応させていきながら、その価値を拡張し、更新し続ける連続性の中にキュレーターの仕事はある。意識的なキュレーターの中には、今芸術品と呼ばれているものの価値がいつかすべて忘却され、無価値なオブジェによって占められる《廃墟》と化す場面が、たえざるオルタナティブな未来のヴィジョンとして潜んでいるのである。」と長谷川祐子は著書『キュレーション　知と感性を揺さぶる力』の中で意識的なキュレーションを説いた。

smtの空間(建物)では管理者と利用者は常にイーブンな関係であり、この相互作用は、鷲田清一氏の「フォロワーシップ」の思想とも重なり、現在のsmt全体にも広がるユニークな方針と言える。そして止まる事のない「永遠のアンダーコンストラクション」はドールスの言う「恒常的に変化しないこと」と同義であり、smtがかかげる恒常的な三憲法を常に保持していく事と読み直す事が出来るかもしれない。また、長谷川の指摘する、いつか《廃墟》と化す場面を意識的に予測しながらも、現在の社会の動きを柔軟に読み込み、それを活き活きとした空間に投げかける(プロジェクト:投企)型のキュレーターの誕生によって、仙台という地方都市にありながらも、メディア技術の進展を巧みに操り、世界へ発信していく東北で、いや全国においてもユニークな複合施設となる可能性は、これからも大いに秘めていると言えるのではないだろうか。

註

1. フランスのル・モンド紙においては「伊東豊雄のsmtで有名な仙台」と記述されたこともあり世界中からの観光客も多く、海外ではsmtが仙台のランドマークの1つとなっている。建築界のノーベル賞とも言うべき「プリツカー賞」を日本人で5番目に受賞している。
2. 伊東豊雄建築設計事務所.(2002).『建築:非線型の出来事』. 東京:彰国社のデータは大変正確かつ明解であり、「チューブ、プレート、ダブルスキン」の詳解の為に参照した。

3. 妹島和世(せじま かずよ) 1956年 茨城県出身。プリツカー賞も受賞した日本の建築家。伊東豊雄建築設計事務所にも在籍(1981-1987)した時期がある。
4. Blurring Architectureの最終段にある、「せんだいメディアテークは永遠に〈アンダーコンストラクション〉でなくてはならないのだ。」の一文にこれまでの多くの事業は触発されてきた。
5. 動き出したアンビシャスなノードたち
「Intercommunication No.20」(1997) 特集20世紀のスペクタクル空間に詳しい。
6. セレンディピティ効果
ふとした偶然をきっかけとしてそこからひらめき、ある種の幸運をつかみとれる能力のこと。
7. ZKM カールスルーエ・アート・アンド・メディア・センター
ドイツ、バーデン=ヴュルテンベルク州、カールスルーエ市にある公営のメディアアートや現代美術の研究所であり美術館のこと。
8. パラダイム・シフトの時代に対応するメディアテーク
石井威望著 せんだいメディアテーク・プロジェクトチーム.(2001).『せんだいメディアテーク・コンセプトブック』.東京: NTT出版
9. 奥山仙台市長及びせんだいメディアテークの皆様方へより
伊東豊雄著.(2012).『あの日からの建築』.集英社.
10. 仙台市の政策
1.生涯学習という政策に合致していること。2.震災により市政は圧迫される。したがって低予算で運営可能なこと。3.事業スキームをスタッフがすでに概ね持ち、混乱が少ないこと。4.非常事態を過ごす市民に感情的に受け入れられること、の4つの政策上の合致から行われてきた。
11. 地震はフランス革命の「平等」の概念を生み出したとある。
飯島洋一.(2013).『破局論』.青土社

[参考文献]
Tamotsu SHIMIZU, 2010. "Is it possible to change a City by cultural facilities? Looking back on sendaimediatheque from 1999-2010
台湾国立芸術大学での発表論考から。
伊東豊雄 せんだいメディアテーク・プロジェクトチーム.(2001).『せんだいメディアテーク・コンセプトブック』.NTT出版.
伊東豊雄(出演) (2005).『LANDSCAPE OF ARCHITECTURES 世界の建築鑑賞 VOL.4』.発行元[AV資料(DVD)]
Ignacio Ontiveros, Joan Ramon Pascuets.(2014). Los Arquitectos De La Nada/Architects Of Nothingness.
清水有.「メディアテーク」
東北都市学会.(2004).『東北都市事典』.仙台: 仙台共同印刷
大阪市 (2012).『(別添資料9)主要(類似)美術館施設規模等一覧表』平成22年度 第2回 大阪市行政評価委員会大規模事業評価部会 資料一覧より. http://www.city.osaka.lg.jp/shiseikaikakushitsu/cmsfiles/contents/0000109/109825/12.pdf (閲覧日:2014年10月20日)
太田佳代子.「動き始めたアンビシャスなノードたち」『Intercommunication』, 20号.(1997). NTT出版
せんだいメディアテーク.(2002).『せんだいメディアテーク建設事業のあゆみ』.仙台市
(仮称)せんだいメディアテーク設計競技事務局.(1995).『(仮称)せんだいメディアテーク設計競技記録』.仙台: 仙台市.
伊東豊雄建築設計事務所.(2002).『建築:非線型の出来事』.彰国社.
伊東豊雄.(2013).『伊東豊雄の建築1 1971-2001』.TOTO出版.
古谷誠章.(2014).『十二組十三人の建築家 古谷誠章 対談集』.LIXIL出版.
岡部あおみ.(1997).『ポンピドゥー・センター物語』.紀伊国屋書店
せんだいメディアテーク.(2011).『いま、バリアとはなにか—せんだいメディアテーク開館10周年事業』.せんだいメディアテーク
伊東豊雄.(2012).『あの日からの建築』.集英社.
せんだいメディアテーク・仙台市民図書館.(2012).『東日本大震災の記録—3.11をわすれないために—』. http://www.smt.jp/toplus/wp-content/uploads/2012/03/45cfbf6b525bb3ffe80082b6db21c07d.pdf (閲覧日:2014年10月20日)
鷲田清一.(2011).『平成22年度卒業式・学位記授与式 総長式辞』. http://www.osaka-u.ac.jp/ja/guide/president/files/h23_shikiji.pdf (閲覧日:2014年10月20日)
鷲田清一.(2012).『東北の震災と想像力 われわれは何を負わされたのか』.講談社
ジョルジュ・ブラック.藤田博史(訳).(1993).『昼と夜—ジョルジュ・ブラックの手帖』.青土社
飯島洋一.(2013).『破局論』.青土社
エウヘーニオ ドールス.(1997).『プラド美術館の三時間』.筑摩書房
ハンス・ウルリッヒ・オブリスト.村上華子(訳).(2013).『キュレーション「現代アート」をつくったキュレーターたち』.フィルムアート社.
長谷川祐子.(2013).『キュレーション 知と感性を揺さぶる力』.集英社.
ダニエル・ジロディ、アンリ・ブイレ.高階秀爾(監修)、松岡智子(訳).(1993).『美術館とは何か—ミュージアム&ミュゼオロジー』.鹿島出版会.
Claude Lévi-Strauss. (1962). La pensée sauvage. Paris: Publisher.
Andre Malraux. (1996/2006). Le Musée Imaginaire. Paris: Gallimard Folio Essais.

[執筆者]
清水 有
Tamotsu SHIMIZU
せんだいメディアテーク企画・活動支援室 企画事業係長
Head of Curatorial Section Sendai Mediatheque